

あの青い海のように

二〇二五年 八月 九折空也

わたしが知ったのは、関心とこころは違うものだということだ。
関心は、むしろこころを閉ざすことで生じる心境だ。
江戸時代、徳川幕府は、あちこちに「関所」を設けた。
外様大名たちを信用していないからだ。

「入鉄砲、出女」を関所でファイルタリングした。

徳川幕府の、本丸を揺るがされないために、関所を設けてバリアした。

関心とは、読んで字のごとく、そのこころの関所を意味している。

関心とは、こころが「通じ合わない」ということ、こころに「通じない」ということ、こころに「通じさせない」ということだ。

人は、関心を強めることで、むしろこころに何も通じてこないよう、みずからをディフェンスし、安定させている。

わたしはこのことを、便利な言い方として、「関心安定」という四字熟語にしておきたい。

徳川幕府が関所安定をしていたように、われわれのこころも関心安定をしている。

ここ十数年、人々は、ウェブやSNSを介してでも、あるいはそうでもなく直接のことでも、万事に関心を強くした。

著名人のスキンシップから、見ず知らずの女性の似合う髪型、コンテンツ演者の熱愛と失恋、気弱な男性が食べる牛丼の種類まで、激烈な関心を向けるようになつた。

すべては関心安定のためだ。

本当には、何にも通じていない、何らこころに得ていない、本当に通じて遊んだことのない、そういう致命的な危機にある人が、危機に向き合いかず安定を欲した結果として、人々は異様な関心モンスターになつた。

見ず知らずの未成年が飲酒をしていた、赤の他人が赤の他人と不倫を

していた、会話することもない少女の下着を覗き見て推し活をすること

でもなかなか、そのようにはできないものだ。
ただ、それぞれ、本当はいつだって本来の世界に帰ることができた。
と思い込んだ。

そのように、思い込みたくて思い込んだのではない。

なぜそのようになつたのか、成り立ちは不明だ。

ただ、それぞれ、本当はいつだって本来の世界に帰ることができた。
でもなかなか、そのようにはできないものだ。

にした、しかし彼女の箸使いが拙劣だったのでコメント欄から注意することにした。

人々は関心モンスターになってしまった。

激烈な関心が「こころある人」になりうるわけがない。

激烈な関心は人に孤立した信条をもたらす。

男はしょせん○○、女はしょせん△△、勝ち組、親ガチャ、××カス。

こころのまま、どのような嵐をくぐり抜けてきたというわけでもなく、電脳端末個室で鼻くそをほじくりながら、もう溶解することのない酸鼻な信条だけが結晶した。

一般についぞ知られることがなかつたのは、「こころ」はそもそも、外側に「つながらない」ということだつた。

こころはそもそも、閉塞部に存在している。

われわれはそもそも、子供が宿題を忘れてきたとして、それが「うつかり」なのか「わざと」なのかさえ、そのこころのうちは知りえないのだ。

子供が、「うつかりです」と言い張ろうが、「わざとです」と言い張ろう

が、けつきよくそれが真実の言なのかどうかをたしかめる方法はない。

なんでもない小旅行について、「楽しかつたです」と言つているのが、

本当なのかウソなのかさえ、その本当のこころは、外部の者には確かめようがないのだ。

このことを、プライヴェートという。

われわれにできる、せめてまつとうなことは、そのプライヴェートをプライヴェートのままに取り扱うことだつたろうのに、このごろわれわれは関心モンスターになり、そのプライヴェートを関心で食い破れるのだと思つてしまつた。

このことはもう、現代のわれわれが、「こころ」というそれじたいに盲

になり、視力を失つているということを意味している。

こころはもともと閉塞部に存在しており、外には出せないもので、そもそも孤立して存在するものだ。

その孤立が、耐えがたくて、人はそのこころを外側に出すことになった。にすがることになった。

それで、こころの代わりに、こころの出張所が出張ることになった。出張所は「関所」だ。

それでわれわれは、「関心」が自分のこころなのだと誤解するようになり、その誤解の分厚さにみずから呑み込まれていくことになった。

こころは閉塞部にあり、そもそも、外部とつながるという性質がない。にもかかわらず、このあわれなこころを、孤立から救つてくれる仕組みが与えられていた。

本来はそれが与えられてあつたのだ。

それは「遊ぶ」ということだつた。

閉塞部と対比して、遊び部が存在している。

こころは閉塞部にあるが、そのこころに、遊び部の上下のストリームが吹き抜けている。

遊びの風、稽古の風、可能性の風、教えと導きの声が、縦向きに吹きあげ、吹き下ろしている。

それは与えられたものであり、われわれに宿されたものではない。われわれの自家製にはありえないものだ。

人と、犬がいたとして、人が何を言つてゐるかは、犬には理解できないし、犬がどういう匂いを嗅いでいるかは、人には共感できない。

それでいて、人と犬は、愛しあうなら、これほど遊びあうのに向いた仲はない。

そうして、遊び部で通じるということ、プライヴェートで、こころの真ん中でこそ通じるといふことが、われわれに与えられていた。

決して自家製の気持ちで、そうしたことが引き起こせるわけではないのだが、われわれは電腦端末個室で関心モンスターになつてしまつたので、すべてのことは自分の関心でのみ引き起こせるのだと、誤解するようになつてしまつた。

わたしが無言で、呼びかけると、よその犬でさえ、ハツと気づいてこちらを向く。

「遊ぶの？」
「遊ぶぞ」

遊び部へのアクセスがあり、その信号を、犬は聞き取つてゐるのだ。心理学者ユングは、もともと当人が超心理学への傾向を有していたので、このことを集合的無意識説で明かそうとしたが、そのことはどうやらあまりうまくいかなかつた。

集合的無意識という言ひ方で説明されているものはむしろ、「関心」、孤立したこころが孤立を食い破ろうとして、相互にプライヴエートに侵入し、自我インフレーションを起こすということに見られる。

遊び部でこころの真ん中が通じるという、単純なことの中にいるかぎり、集合的無意識という「不穏な」そのことは考えなくてよい、まったく無縁なことだ。

ユングはそもそもが精神医学の徒で、精神医学ということは、つまりは精神的な病人を相手にしてきたものだから、精神的にこじれた者の文脈が、主体にならざるをえない、そういう背景もあつたのだろう。

犬とよく遊んでいる人の精神分析など、医者はするものではないから。

わたしが犬に、無言でも呼びかけると、犬はハツとして、「遊ぶの？」と立ち止まる。

人も同じだ。

人の遊びは、犬ほど単純ではないかもしけないが、同じだ。

「遊ぶの？」

「遊ぶぞ」

無言のうち、これだけでも、泣き出す人をわたしはたくさん見てきた。こころの真ん中が通じるということ。

こころの真ん中で、声が聞き取れるということ。

些末なことでも、むつかしげなことでも、何を言つてゐるか、こころの真ん中ではつきり「わかる」ということ。

そのとき、自分のほうからも、こころの真ん中から、つまりプライヴエートな、笑みと、声と、ことばがあふれてくる。

ポロッと、本当にあふれてくるのだ。

われわれには本来、そういうものが与えられていたということ。

自家製で起こせるような現象ではない。

関心という、ひどく汚らしいものを持ち出す必要はない。

汚らしいものを持ち出していないので、それを糊塗する、作り物の笑みを貼り付ける必要もない。

どのようにしたらよい、という、あさましい関心を捨てなくてはならない。

もともと与えられてあるものに、どのようにしたらよい、というような考え方は必要ない。

遊ぶといえば、ほ乳類は、乳飲み子でもすでに遊んでゐる。

子猫は、まだわけもわからず、目の前にあるもので遊び続けるだけだが、そうした子猫について「こころがない」とは誰もみなさない。

子猫には信条がないだけだ。

どのようにしたらよい、という、定番の発想が湧いてしまうのは、われわれがすつかり、自家製の「信条」に染まりきつてしまつてゐるからだ。

信条を得、関心を向けたら、意欲的で、そのことが出来るようになると思つてゐるのは、どこまでも自家製ですべてが出来ると思ひ込んでゐる

る思い上がりだ。

どのようにしたらいいか、また、じつさいどのようにしたのかは、わたくしとあいつだけが知っている。

すべての場合において、わたしがあいつだけが知っている。

なぜなら、遊ぶというのはこころの真ん中のことなのだから。

遊び部は、われわれの自家製のものではなく、もともとこの世界のわれわれに与えられてあるものだが、その縦向きのストリームが、われわれのこころの真ん中に吹き抜けている。

こころの真ん中、それはつまり「あいつ」だ。

目の前の「こいつ」、またそこにいる「おれ」。

どのように通じ合い、どのように遊んだのかは、おれとあいつだけが知っている。

「プライヴエート」なのだから当たり前のことだ。

「どのように」ということは、すべての個々に、そのときごと与えられているのであって、信条のごとく、類型されて概念化・パターン化されているということはない。

メソッドはないのだ。

そもそもわれわれの自家製のものではないゆえに。

また、そもそも与えられてあるものに、メソッドなど必要ないゆえに。

この、与えられてあるものは、それじたいが美であり、それじたいがやさしさだった。嘆くべきは一点、この美とやさしさに対する盲があるということに尽きる。

見ず知らずの飼い犬に呼びかけ、犬はハツとし、

「遊ぶの？」

というやりとりがなされる。

そこに現れているのは、美であり、やさしさだ。

動物愛護の精神が現れているのではない。

むしろ言うならば、そこに現れているのは「愛」という単体の、シンプルなものであって、動物好きとか動物愛護とか、情操というような、いかがわしくややこしいものではない。

シンプルに言うなら愛、体験的に言うなら美とやさしさで、それらはすべて、われわれの自家製のものではありえない、もともとはわれわれに与えられたものだ。

愛にせよ、美とやさしさにせよ、われわれはあまりみだりに、そのことを口に出すべきではない。

なぜならそれは、われわれの自家製のものではなく、この世界とわれわれに与えられた、天地と場所のものだからだ。

自家製の信条を言うようには、愛や、美とやさしさを言うべきではない。

先に述べたとおり、本質的には犬に向けるそれと変わらず、わたしが呼びかけるとき、それだけで泣き出す人をたくさん見てきたと述べたが、そのことについて、「やさしかつた」と言わない人はいない。

けれども、世の一般で言うなら、やさしいも何も、わたしがまだ何もしていないだろう。

われわれの往く先は、大きく言えば次の二手に分かれる。

ひとつには、遊び、稽古し、稽古してまで遊び、こころの真ん中が通じあい、美とやさしさを豊かにして、つまりこの世界とわれわれに与えられたものに恭順して生きる。またその彼岸にまで往く。

もうひとつには、与えられてあるものが信じられず、疑い、その醜さをみずからに閉ざすため、関心安定法を用い、関心は孤立した自家信条を形成し、つまり自分内部に湧き立つ孤立閉塞したものに恭順して生きる。またその彼岸にまで往く。

すべての始まりは盲によつて。

光よりも盲を選んで愛したことによつて。

盲のくらやみ、その中に湧いてくる自家製の信条、それを権威として抱きかかえて進む。

もともとこの世界のわれわれに与えられているものよりも、みずから
の信条を上回らせ、与えられているものを否定するのが、身を賭しての
使命となる。

閉塞部の奥にいるマグマの王に謁見するのだ。
閉塞部のすべてはそこから湧き出しているのだから。

かつて、誰かがそのようにしてきてくれたように、わたしもここに、

ところはもともと閉塞部にある。

こころはもともと孤立している。

それがさびしくて、人はこころを、外側に出してつなげるという虚妄に囚われる。

それで実際に押し出されるのはこころの閑所だ。これが「関心」となる。

「関心」を強く押し出すと、そのたびに、こころは孤立していない、といふ錯覚を得ることができる。

それによって安定が得られるので、この方法は「関心安定」と呼んでよい。

とはいへ、この関心は、けつきよくこころのつながりではなく、むしろこころの閉鎖だ。

たから、それさえも踏み破ろうとして、つまり「闕所破り」をしようとして、闇のうちのはたらきを認可してはじめる。

そのことは、心理学では集合的無意識と呼ばれ、関所破りをしたさまざま
ざまな元型たちは、自我に侵入して自我インフレーションを起こす。

これらの関心が、当人に慰めと諍（いさか）いをもたらし、その慰めと諍いの蓄積から、当人の内部（閉塞部）には「信条」が形成されていく。

そのことを、当人はまるで、さまざまな人生経験から、いろんなことがわかるようになつた、大人になつた自分、というふうに捉える。

こうして当人は、じつはどこにもつながっていないところと、何にもつながっていない自家製の信条を抱きかかえたまま、その重みがもたらす世界へと進んで往かねばならない。

重みがもたらす世界へ進むというのは、直接的に言うなら「落下」だ。果てしなく落下していく。

閉塞部の地底には、マグマの王がいて、やがてその王に謁見することになり、これまで自分が何に仕えていたのかを、そのときになつて知ることになる。

これらのことばは、すべて一点の盲から起こつてゐる。

美とやさしさの言。

やさしいということがわからなかつた

やさしいことが見えなかつた。

やさしいということを視たくなかつた。それを見るといふことが受け容れられなかつた。

うつくしいということを視ると、自分がそれではないということ、自

分は醜いといふことも、同時に見なくてはならなかつた。

信条を捨てられなかつた。

しかし信条を抱いたままいくべきだったことはできなかつた
信条を抱えた自分が醜いということはどうしても自分を破綻させ

だから盲を選ぶことにした。

美とやさしさが、そもそも見えなければ、自分は構造的破綻に至らず。

にいられる
言条を抱

ぬことを、盲のくらやみの中に隠しておくことができる。

しかしその虫の好い考えは、さらに多大な罪を犯していくだろう。
やさしさをないがしろにし、美を踏み汚して進んでいく。
それが見えないのだから。

盲なのだから。

やさしさを、破れたビニール傘のように扱い、美を、矢を投げつける
ダーツボードのように扱う。

もともとこの世界とわれわれに与えられた、自家製でないものを、
たそのことに身を投げた人たちのすべてを、そのように平然と踏みにじ
つていく。

そうしないと自分が破綻するから。

とつぜんだが、この話はいきなりここで終わってしまう。

あまりにもとつぜんだ、わたしもまつたくそのような予定ではなかっ
た。

しかし、いましがた、決定的な「お知らせ」が来てしまったので、わた
しはここで引き上げなくてはならない。

あのときからずつといらしたのですか？

よくよく考えれば当たり前のことではあります、話はもともとひとつ
ですから。

ああ、これがそのストリームで、それはあのときからずつと続いてい
るのですね。

古今、ということに、いま気づきました。

それで、あの青い海のような人でしようと、言われたのですね、よく
やくその意味が聞き取れました、ありがとうございます。

〔あの青い海のように／了〕